

平成30年度

熊本大学熊本創生推進機構 公共政策コンペ 報告書

熊本の元気を 私たちが創る。

日時:平成30年11月10日(土)

会場:熊本大学工学部百周年記念館

主催:熊本大学熊本創生推進機構

後援:熊本県・熊本市・熊本日日新聞社・熊本商工会議所・大学コンソーシアム熊本

主催者あいさつ



熊本大学熊本創生推進機構
地域連携部門長

新留 琢郎

本日は、第10回になります公共政策コンペにお集まりいただきまして、大変感謝申し上げます。

私は30代のころ住んでいた公務員宿舎の自治会長やPTAの副会長をやったことがあり、意外と地域の運営は大変だなと身をもって経験しました。そういう経験もあり、今日のコンペは大変楽しみにしております。

ご存じの方も多いと思いますが、このコンペは大学の学生さんや自治体の若い職員の方々が、どういう地域づくりをすれば盛り上がるのか。あるいは、若い人たちがどうやって地域の活動に入っていけるかということを考えて提案し、また新しいかたちの地域をつくる考えを出す場だと思います。

もう一つは、熊本地震の発生から2年半が経過し、風化していくことや、同時に新しく出てきた問題をどうするかなど、多くの課題があると思います。そういったことに関して、たくさんの活発な議論をしていければと思います。

本日は一番前に座っていらっしゃるベテランの方々も、審査員として色々なコメントをしていただけることと思います。もちろんベテランの方々なので、色々な経験に基づいた厳しい質問もあるかもしれませんが、おそらく若い人たちにとっては、若い人にしか分からない、あるいは感じるができないこともあると思いますので、ベテラン vs 若手のような闘いの場であってもいいのかなと思っています。

本日は「熊本の元気を、私たちが創る！」というテーマです。自治体の若手の方々から5チーム、学生から3チーム、合計8チームのエントリーがございました。プレゼンテーションとポスターセッションを通して、活発な議論、討論、そしてバトルを繰り広げていただきたいと思います。

CONTENTS

主催者あいさつ	1
コンペ当日の流れ	2
政策提言	
菊池L♡VERS	3
つながろう！くろかみ	3
TOM	4
FKHR	4
菊池スイッチON!	5
熊本大学大野研究室	5
菊池で育てていいとも!	6
「里県だモン」	6
質疑応答 & ポスターセッション	7
受賞作品発表	7
講評	9



コンペ当日の流れ

開会

開会挨拶

熊本大学熊本創生推進機構 地域連携部門長

新留 琢郎

発表

- 1：菊池 L♡VERS（菊池市役所）**
助け合い～菊池～田舎(inaka)に愛(i)が入って良い仲間(iinaka)に
- 2：つながろう！くろかみ（熊本大学）**
黒髪地区における学生と地域のゆるやかなつながりづくり
- 3：TOM（菊池市役所）**
世界の国から Do you 農業？
～世代・国籍を超えた農業社会の実現を図り、農業の生涯学習化を目指す！～
- 4：FKHR（熊本大学）**
VIVA! 耕作穂浮季地～耕作放棄されない地～
- 5：菊池スイッチ ON ♡（菊池市役所）**
あなたのやる気スイッチ押します！
～市外へ行った「わきやあもん：若者」BIG なって帰ってけえ～！
- 6：熊本大学大野研究室（熊本大学）**
行動経済学的アプローチによる熊本県の移住・定住政策
- 7：菊池で育てていいとも！（菊池市役所）**
市民一丸となって子育てに取り組む『菊池一族 子育て応援隊』の創設
- 8：「里県だモン」（熊本県）**
プロ里プロジェクト ～『プロフェッショナルな子育て』という働き方の提案～



ポスターセッション

熊本創生推進機構 地域連携部門の取り組みについて

審査結果発表、表彰式

審査員講評

閉会



助け合い～菊池～ 田舎(inaka)に愛(i)が入って良い仲(iinaka)に

菊池市の地域コミュニティの強化検討グループ 菊池L♡VERS 中武 郁夫・岩本 敏・岩本 祐・塚・西嶋 廣

菊池市も少子高齢化が進んでおり、人口減少(若者離れ)も拍車がかかっている。さらに、子育て世帯の相談件数も年々増えており、今後は、地域住民同士の繋がりが地域力を強くして助け合いのまちづくりを目指す必要がある。

地域コミュニティの衰退に歯止めがつかない! 世帯の孤立化と緊急時の連携が困難になる

若者離れ

年間の約200件もの相談件数が…年々増加

若者は定住してくれない、ターゲットを高齢者に絞って考えてみよう!

なら…

- 市街地と山間地域が混在する「ちょうどいい田舎」でセカンドライフを!
- 趣味やスポーツでいいつながりをかいて、疲れを温泉で癒せる環境がある!
- 市の医療費削減にもつながって、住みよくなる!

提言内容①	提言内容②	提言内容③
高齢者でも移住しなくなる環境づくり 生涯学習センターや地域の公民館で、高齢者の知識や技能を身につけた有志、本町や市外、若者層への自立支援を推進する。高齢者が活躍できる場所をつくることで、「生きがい」を感じられるようになる。	子育て応援プロジェクトの実施 子育ての負担が大きくなり、虐待等の相談件数が増えている中、保育施設等を活用して高齢者と祖父母の世代の間の関係を築く場を設け、かかる大会や茶道教室などを個別と一緒に行うことで「生きがい」につなげる。それによって保護者も子育ての負担の軽減を図れるほか、高齢者本人の認知症予防などにもつながる。	IT政策の実施 ※KITとは、Kikuchi Information Technology 移動販売業者と利便性の高い地域の住民とをIT機器を使ってつなぐことで、住民も必要なものをすぐに伝えることができる。また、そのようなIT機器をいっせいで100歳前後が定住している地域の拠点に整備することで、みんながネットショッピングを楽しんだりできる。買い物に参加者も増加し、元気づけりや地域住民のコミュニティ形成がよりマッシュアップし、高齢者の「生きがい」につなげる。

効果
近隣住民同士のつながりが生まれることで災害に強いまちづくりができます。さらに、地域コミュニティを高めることができれば、若者の流出を減らすことができ、高齢になっても「生きがい」を見いだし、安心して生活できる場所が維持されていきます。地域コミュニティの強化だけでなく、高齢者の孤立化の問題や家庭の「子育て」の負担軽減も図ることができそうです。

黒髪地区における学生と地域のゆるやかなつながりづくり

チーム名: つながろう!くろかみ
メンバー: 江村和大・櫻井理紗・宮崎純理・金城幸作・高山未来 (熊本大学法学部伊藤洋典研究室)

解決したい課題
「学生が地域コミュニティに入る入口がない」

入り口がないと、...
地域コミュニティのつながりが欠如
↓
コミュニティ内の連携が生まれない
↓
防災・防災の面で不安

学生の実態
行先のイベントに関心はありますか? 地域活動(市内、市内)に関心はありますか?

学生が地域・行政に対して無関心
→地域や行政が情報を流してもその情報が伝わらない

伝わらない場合...
①学生にとっては、地域を知る、地域と関わる機会を失う
②地域にとっては、学生の意見が入ってこないため、学生のために行動できない
⇒お互いにとって不利益になる

私たちの提案「大学を介した地域コミュニティづくり」!

提案① ボランティアセンター
大学のボランティアセンターを設置して、学生と地域の関係性を強化する。

提案② COCとの連携
COCとの連携により、地域志向の授業を行い地域課題を解決する人材を育成することを目指す文科省の事業の一つで、この事業内で住民の方にお越しいただき、ワークショップを行います。これによって、いきなり地域の中に飛び込むよりもハードルが下がり、自分の住んでいる地域について、思い直す、思い返す場ともなります。

提案③ 学内のサークルを活用
学内のサークルを活用し、学生と地域の関係性を強化する。

まとめ
大学
↓
学生にとって身近な存在
↓
学生が地域コミュニティと関わるきっかけとなる

助け合い～菊池～田舎(inaka)に愛(i)が入って良い仲(iinaka)に

菊池市が将来像に掲げる「自然の恵みを守り、自然を活かして穏やかな発展を続けていく安心・安全癒しの里きくち」を実現させるためには、その地域に住む人たち、その地域を守っていく人たちの協力が不可欠です。そのためにも、その地域コミュニティを衰退させない、むしろ充実させていくことが不可欠であると考えました。

現在の菊池市は人口減少による地域離れ、地域コミュニティの衰退、高齢者の単身世帯増加による孤立した世帯の増加などの問題を抱えており、全ての年代が地域コミュニティに参加しづらい状況にあります。このままではコミュニティは衰退し、地域活力が低下するとともに、行政の負担が増加します。その解決策として、3つの政策を考えてみました。

まず1つ目は、高齢者が移住しなくなる環境づくりを行います。定年後にまだまだ元気で働きたい、自分の趣味に没頭したいといった元気な高齢者をターゲットにした場合の菊池市の売りは、まさにちょうどいい田舎ということです。医療施設も多く、市街地もそれなりに栄えています。移住後は、生涯学習センターや地域の公民館を活用し、参加者としてだけでなく講師として積極的に招くことで、高齢者の活躍する場所を多く提供し、生きがいを感じてもらえるようにします。

2つ目は、子育て世代の負担軽減を図るために、子育て応援プロジェクトを行います。子どもたちがイベントに参加することで、保護者の子育て負担の軽減にもつながり、教える立場となる高齢者の生きがいづくりにもつながります。

3つ目は、店舗のない地域でも生活が継続できるような買い物支援政策です。現在、第3セクターを中心に移動販売の取り組みを行っており、買い物に集まった高齢者が健康体操に参加し、体操後の自由時間で茶会を行うという、買い物と健康がマッチングして生きがいにつながっています。今後はITを活用した発注システムの導入や、地元事業者の参画を推進し、自然に囲まれ、のんびりとした生活の中にも便利さが混在する、きつとつながる新しいコミュニティを形成します。

題名のとおり、田舎にさまざまな愛が入っています。地域の愛、家族の愛、そして、未来への愛、菊池への愛、全ての愛が入って、地域の皆さんが良い仲にということです。

黒髪地区における学生と地域のゆるやかなつながりづくり

若者が行政や地域に対してどのような関心を抱いているのかを調べるためアンケートを実施した結果、地域とつながりを持ちたいと考えている学生は半分程度ですが、地域の人とつながりを持つことは重要だと考えている学生は81%もいました。その理由は「災害など有事の際に助け合えるから」とする学生が51%と多く、普段からの付き合いというよりも、何かあったときにゆるやかなつながりを求めているのではないかと考えられます。また、町内自治会長さんへのインタビューでは、地域の側も清掃活動やお祭りなどのイベントへの参加や、有事の際のマンパワーとして協力してほしいという思いがあり、普段からの密接したつながりというよりは、適度にゆるやかなつながりを求めているのではないかと思います。しかし、現状ではゆるやかなというよりも、つながりがない状況です。そこで私たちは、大学を介した地域コミュニティづくりについて3つの具体案を提案します。

1つ目は、ボランティアセンターを大学に設置し、学生と地域、行政のマッチングを行います。運営は大学の学生生活課やボランティアに関心のある先生方へお願いし、熊本市のまちづくりセンターの職員などにも加わっていただくことを想定しています。このセンター設置によって、ボランティアに関心のある学生が、ボランティアに参加するための一歩を踏み出しやすくなり、地域や行政も人手が不足しているイベントへの学生の参加を促しやすくなると思います。

2つ目は、COCとの連携です。COCは、地域志向の授業を行い地域課題を解決する人材を育成することを目的とした文科省の事業の一つで、この事業内で住民の方にお越しいただき、ワークショップを行います。これによって、いきなり地域の中に飛び込むよりもハードルが下がり、自分の住んでいる地域について、思い直す、思い返す場ともなります。

3つ目は、サークルなど学生の側から地域の方も参加できるイベントを企画し、同時に清掃などの地域活動も行います。例えば、囲碁部と将棋部がサークルの垣根を越え囲碁・将棋大会を開き、その後に清掃活動を行えば、学生も参加しやすく地域と学生、そして、普段関わりのない学生同士のつながりが生まれるのではないかと期待されます。

世界の国からDo you 農業？

～世代・国籍を超えた農業社会の実現を図り、農業の生涯学習化を目指す！～

菊池市では農業者が年々減少し、農業が継続できない状況になりつつあります。

Team TOM
 吉良 健太郎 内田 実
 松村 雅太 西川 希実

中山間地域の農業の維持・継続を目指す！！

提言内容1 農業への関心を高める

提言内容2 学べる場の創出

提言内容3 地域での農業の現状

期待される効果

① 農業経営塾で実践的なノウハウ等を学ぶことで農業従事者が増える。
 ② 農業従事者が増えることで、空き家や耕作放棄地が減り、良質な景観の形成や国土・水源の保全などの多面的機能が維持される。
 ③ 農業に従事しながら菊池市で生活する人が増えることで、菊池市の人口増加につながる。

世代・国籍を超えた農業社会が形成され、農業主体のライフワーク化が実現する！！

vival耕作穂浮季地～耕作放棄されない地～

課題

- 耕作放棄地の増加
- 農業就業人口の減少・高齢化

耕作放棄地とは？

過去1年以上の間、作物の栽培が行われておらず、今後も耕作に使われない農地

耕作放棄地の問題点

- 除草や害虫の増加
- 畜産部局への影響
- ゴミの不回収
- 農地の持つ多面的機能の喪失
- 土壌としての実質的な価値の低下 等

田んぼアート・ツーリズム

現在田んぼアートが行われている地域と連携し、一地域にとまらぬ、熊本県全体のイベントとする

「穂」

田んぼアートの作成
 耕作放棄地を田んぼアートとして利活用

「浮」

気球に乗れるイベントを開催
 自分の地元を上空から眺められるので、地元住民にとって地域のいいところを再確認でき楽しめるイベント

「季」

花を植える
 季節にあった花を学生や地元住民が一斉に植える

期待される効果

- 耕作放棄地の減少
 田んぼアートを作成することで耕作放棄地を有効活用！
- 農業就業人口の増加
 田んぼアートをみた人が農業に興味をもてば、農業就業人口の増加の可能性も！
- 観光客増加
 イベントを通して、観光客の増加が見込まれる。田んぼアートツーリズムによって、県全体の効果が期待！応急仮設住宅を再利用した民泊で更なる観光収入も！
- コミュニティの形成
 田んぼアートや花畑の作成を年代で協働すれば、新しいコミュニティの形成につながる！

世界の国から Do you 農業？

～世代・国籍を超えた農業社会の実現を図り、農業の生涯学習化を目指す！～

現在、菊池市では農業従事者が年々減少して、このままでは農業が継続できない状況になりつつあります。それに伴い、耕作放棄地が中山間地を中心に増加し、このままでは農地の持つ多面的な機能が失われ、公共財としての役割が果たせなくなってしまう。農業従事者の不足を解消するためには、特に新規就農者を増やす必要がありますが、そもそも若い人や外国の方が農業に興味がない、どうやったらいいかわからない、農業で生活できるか自信がないという状況で、このことが新規就農者不足の要因になっています。こうした課題を解決することで、担い手の確保や景観の保全につなげ、中山間地域の農業の維持継続を目指すために提言をしたいと思います。

まず、1つ目は農業への関心を高めます。外国人に対しては、中山間地域への農家民泊やワーキングホリデーを通して、日本の生活や農業を体験していただき、日本の若い人には、くまもと農人プロジェクト等を通じて農業活動に参加・体験していただきます。

次に、2つ目は農業に関心を持った人たちが学べる場を創出します。学べる場として、菊池市内に農業経営塾を開塾します。地方対象者は、農業の経験の有無を問わず誰でも参加することができ、外国人の方も一定の日本語能力を有していれば受講することができ、世代、国籍を超えた学びの場とします。指導者に関しては、技術面を市内在住で既に農業をリタイアした元農家さんが、経営面を本市が協定しているアグリフューチャー・ジャパン（AFJ）が運営する農業経営大学校の講師が指導を行います。元農家さんが指導する立場で農業に携わることで、農業の生涯学習化を目指します。そして、農業実践力を身に付け、中山間地域で農業生活できる人材育成を目指します。

3つ目のプロセスとして、この経営塾で学んだことを生かして、実際に菊池市で農業を実践するために3つの支援を行います。住居は市の空き家バンク制度を活用し、農地は農地バンクくまもと等を活用し、農地の貸し付け等を行います。また、販路は市役所食堂の開店や、学校給食への食材提供を通じて支援を行います。

この政策により、農業の担い手増加による農業の維持、また、景観保全による公共財としての機能保持、そして菊池市の人口増加が期待でき、そのことで世代、国籍を超えた農業社会が形成され、農業主体のライフワーク化の実現を図りたいと思っています。

VIVA! 耕作穂浮季地

～耕作放棄されない地～

現在、日本では農業就業人口の減少や農業従業者の高齢化が進み、それに伴い耕作放棄地が増加しています。耕作放棄地が増加すると、鳥獣・害虫による周辺農地への悪影響や、食糧自給率の低下など、さまざまな問題が発生します。熊本県でも同様の問題が発生しており、県としても見過ごすことができない問題となっています。

そこで私たちは、「穂」「浮」「季」の3つの文字をコンセプトとしたイベントを開催する耕作放棄地の利活用案を提案します。県内の複数箇所で開催することで、熊本県全体を盛り上げることができると考え、「田んぼアート・ツーリズム」と名付けました。すでに玉名市、上天草市では田んぼアートが実施されており、新たに益城町、山鹿市、宇城市を新規の開催候補地として提案します。スタンプラリーやフォトコンテストを行うことで、各地域をより密接につなげることができると考えました。

耕作穂浮季地の「穂」「浮」「季」の3つのコンセプトを具体的に見ていきます。「穂」は稲穂をイメージしており、田んぼアートを作成し、耕作放棄地を利活用します。また、既存の仮設住宅を再利用して、観光客や農業体験、新規農家への宿泊施設とします。撤去される予定の仮設住宅を宿泊施設として再利用することで、観光収入の増加と仮設住宅の解体費の削減ができると考えました。「浮」は気球が浮くイメージを表しており、気球から田んぼアートや花畑を見てもらいます。また、上空から、自分の町や通っていた学校を眺められるという、観光客だけでなく地元住民にも楽しんでもらえるイベントにします。「季」は季節によって楽しめるイベントをイメージしています。季節に合った花を植え、田んぼアートとともに気球、または地上からも楽しむことができます。

田んぼアート・ツーリズムにより、耕作放棄地の減少と農業就業人口の増加だけでなく、付加価値として観光客の増加やイベント時に交流が生まれ、ありとあらゆるコミュニティの形成が期待できます。田んぼアート・ツーリズムで耕作放棄地を解消し、熊本の元気を創りたいと思います。

あなたのやる気スイッチ押します!

～市外へ行った「わきやあもん:若者」BIG になって帰ってけえ～!

菊池市の人口は年々減少しており、若年層の減少が顕著です。人口が減少すれば町が衰退していくことが明らかでありながら菊池市を離れていくということは、自分が菊池市を魅力ある町にしたい、自分が菊池を活性化したいという当事者意識が低いのではないかと考えます。私たちは、誰もが持っている郷土愛を幼少期から根付かせ、また、奥底に眠った郷土愛を芽生えさせるような解決策を提案します。

1つ目の解決策は、名付けて「ドリカムスイッチ」です。子どもたちが菊池をこうしたい、菊池でできたらいいなと、夢を語る場をつくります。子どもたちの自由な発想で菊池の将来を思い、考えることが重要であり、そのことが郷土愛の醸成にもつながります。さらに、子どもたちの思いを聞いた大人たちが刺激され、子どもの夢を実現したいと思う刺激スイッチにもつながると考えます。

2つ目は、地域の魅力を伝える冊子づくり、名付けて「思い出スイッチ」です。地域の暮らしや年中行事、風習やしきたりなどを高校生や大学生が主体となり、地元との協力を得て、子どもたちが調査、体験することで、郷土愛を醸成します。その体験を冊子化し、子どもたちに渡すことで、記録にも記憶にも残り、菊池を離れてからも常にふるさとを思い出すことができることと合わせ、その学んだことをかたちに残すことで、次の世代に伝えることができます。

最後に、Uターン者向けウェブサイトを設置運営する、名付けて「おもしろスイッチ」です。情報化された現代社会において、SNS等の情報は必要不可欠です。そこで、Uターン者向けのウェブサイトを設置運営し、Uターン者が本当に必要としている情報を集約し、正確に伝えることを目的とします。さらに、菊池ツアー体験日記と題して、地域起こし協力隊がYouTubeで1分程度の現地体験動画を作成、配信することで、菊池の隠れた魅力などをユニークに伝え、菊池に住んでみたいと感じてもらえることを目的とします。

郷土を思う心は誰もが必ず持っているものです。今回の提案では、その心の部分を育てること、訴えることが重要だと考えました。提案した3つのスイッチを押すことで、それぞれが持っている郷土愛が目覚め、菊池に戻って仕事がしたい、活躍したい、恩返ししたいと思い、多くの若者が菊池に戻ってくるようになります。市外でさまざまなスキルや知識を身に付けた人は仕事に生かすだけでなく、スポーツや地域活動の活性化にも波及するなど、相乗効果も期待できます。

行動経済学的アプローチによる 熊本県の移住・定住政策

熊本県は平成11年をピークに人口が減少傾向にあります。人口が減少すると税収が減るなどの問題があるため、今回、私たちは熊本県の人口増加をさせる政策を行うべきだと考えました。その中でも、効果の期待できる移住政策を行うことが必要であると考えます。

移住政策を行えば、移住者が増加し、人口減少に歯止めをかけることができます。移住政策を行うためには、ほかの地域の住民の移住に関する心理について知る必要があります。行動経済学のアプローチによって考えました。本提言では、移住政策の理論と、具体的な政策としての移住体験について提言します。

今回は、行動経済学におけるメジャーリーグの観戦行動モデル Coates et al. (2014) に Bliss point アプローチの公共政策モデルを組み入れた移住・定住政策の理論的分析を行いました。その結果は、1つ目が、移住が成功する主観的確率が高い場合だけでなく、低い場合においても移住が発生する。2つ目が、損失回避性が高い個人ほど、移住するインセンティブが低くなる。3つ目が、近郊において成功する主観的確率は、損失回避性や個人の公共政策の好みに影響されるということです。

次に具体的な政策について提言します。まずは空き家を有効活用した移住・定住政策です。空き家バンクに登録されている空き家を自治体がいちいち買上げ、もしくは借り上げ、リフォームをした上で移住者の居住地として活用し、そこで短期間の移住体験を行うという政策を提言します。移住体験を取り入れるメリットとして、移住体験をすることで、事前の不確実な様子を解消することで損失回避性が低下されることにより、移住発生の期待を上げています。また、移住体験の期間に、移住地の自治体の移住・定住の担当職員と相談が可能といったところを挙げており、そこで移住・定住に対する政策の隅々まで周知させることができると考えています。他にも、短期間ではあるが移住するため現地で職探しや物件探しができることや、通常の移住体験政策実施が難しい自治体においても、移住政策の実現可能性があるところをメリットとして挙げています。また、こちらの空き家バンクを有効活用することによる空き家問題の解消ということも、併せてメリットとして挙げています。

市民一丸となって子育てに取り組む『菊池一族 子育て応援隊』の創設

菊池市では、少子高齢化や地域のつながりの希薄化など、さまざまな子育てに関する問題が生じています。そこで私たちは、子育てに関する課題を3つに絞り検討を行いました。

まず、1つ目の課題は子育ての孤立化です。過去に菊池市で行われたアンケート調査によると、子育ての約4割が母親任せになっており、父親が積極的に子育てに関われる環境づくりが必要と考えます。また、地域を巻き込んだ支援の取り組みも必要と考えます。2つ目の課題は、経済的理由による教育格差です。教育格差は、親の所得格差が子どもの教育費にかけられる費用に直結しており、結果として子どもの将来に影響を与えてしまうため、教育を受けられない子どもたちへの支援が必要と考えます。3つ目の課題は、子どもの健康です。健やかな子どもの成長のため、菊池の豊かな地元の食材を生かした支援策が必要であると考えます。これらの課題の解決に向けて、みんなで子育て支援を行うというコンセプトで、3つの矢を放ちました。

第1の矢、作戦その1は菊池一族子育て応援隊の創設です。行政や学校、企業など、あらゆる機関が参画する市民全体を巻き込んだネットワークを創設します。その中で、子育て支援が可能な人材を登録する、御家人バンクをつくりまします。また、各地域に子育て目安箱なるものを設置し、多様な世代から子育てについての意見を聞くことで、子育て支援に活用します。それから、父親が子育てに関わりやすいよう、企業などへ協力を呼び掛けまします。

第2の矢、作戦その2はお助けプランです。先ほどの御家人バンクの人材を活用した菊池寺子屋という公営の学習塾を開設まします。ほかに、ピアノ、体操など、幅広い学習の機会を提供し、教育格差により子どもたちの学習の機会が奪われないよう支援まします。

第3の矢、作戦その3は日本一おいしい給食プロジェクトです。本市の地元食材を生かした、日本一おいしい給食を提供することで食育の充実を図ります。次に、栄養面が心配される子どもたちへ、気軽にいつでも利用できる子ども食堂を提供まします。

これらの3つの矢を放つことにより、誰もが気軽に子育ての悩みを共有できる地域社会や、菊池の豊富な資源を生かした食育の充実、子育てに関わる人材を地域から発掘することで、高齢者を含めた地域住民の生きがいつくりにつなげたいと考えまします。

プロ里プロジェクト ～「プロフェッショナルな子育て」という働き方の提案～

課題
ライフスタイルの変化による児童養護施設職員、保育士の離職
「今の生活を変えないと結婚は無理・・・」「結婚するから辞めます・・・」
はもったいない!!!

提言内容
「プロ里」
～児童養護施設、保育士などの経験者
～子どもの養育に関する専門職
～プロ里養成講座を受講

効果
～社会的養護に携わる人材の受け皿の確保
～ライフスタイルに合わせた専門的な養育
～里親の増加による家庭養護の促進



プロ里プロジェクト

～『プロフェッショナルな子育て』という働き方の提案～

「今の生活を変えないと結婚は無理」「結婚するから辞めます」。これは、児童養護施設の職員さんや保育士さんから、しばしば聞かれる言葉です。子どもたちのために頑張る人が仕事を辞めるという選択をするのは、あまりにももったいない、そう考えまします。

結婚や出産、子育て、さまざまなライフスタイルの変化があったときに、周囲の協力や理解をもらって仕事を続けるという選択をする人もいれば、残念ながら仕事を辞めていく人もまします。その人たちに提案をしたいのが、プロ里です。プロ里になるには、まず、養育里親に登録をまします。養育里親とは、親と暮らせない子どもたちを保護者と再び一緒に暮らせるようになるまで、あるいは、子どもが自立するまでの一定期間、家庭に迎え入れて養育をする人のことです。プロ里の場合は、この養育里親に登録をした後、さらにプロ里養成講座を受講して、プロ里に認定されまします。このプロ里により、次の3つの効果が期待されまします。

まず、1つ目は、さまざまなライフスタイルの変化によって、子どもに関わる仕事を残念ながらあきらめていく人の受け皿となることです。

2つ目は、ライフスタイルに合わせた専門的な養育を行うことです。里親養育は、自宅といった私的空間で子どもを預かる公的な養育ですので、これが可能になります。

3つ目は、家庭的養護の促進です。この取り組みを行うことで、必然的に里親家庭が増加まします。プロ里に限らず、里親養育には公費による金銭の支給があります。子どもの養育費用を賄うことができ、余剰分は所得となります。

プロ里が広がることで子どもの養育に関わり続ける機会を確保し、その結果、家庭で暮らすことのできない子どもが、家庭的な生活をするための受け皿が増えまします。現在の熊本県では、里親家庭で生活するのは、約90名で、家庭で暮らせない子どもの約11%です。これからさらに多くの子どもが里親家庭で生活できるよう、養育里親を増やしていかなければなりません。またプロ里は、家庭で生活できない子どもたちが抱える特別な悩みへの対応をすでに経験まします。将来的にはほかの里親養育のトレーニングや支援機能を持つこともできると考えまします。

里親制度は子どもの幸せのための制度です。初めて出会う子どもたちに、初めまして、こんにちは。そして、一緒に笑い、一緒に泣く、当たり前のように共に過ごすことができる、そんな幸せのかたちの提案でもありまします。

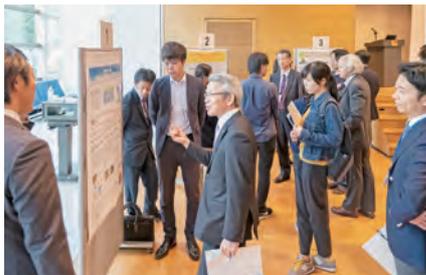
質疑応答 & ポスターセッション



菊池L♡VERS (菊池市役所)

助け合い～菊池～田舎 (inaka) に愛 (i) が入って
良い仲 (iinaka) に

- Q** 政策提言として何がポイントか教えてください。
今ある環境が、もともと高齢者に非常に住みやすい環境だから、菊池市に移住してくださいという政策提言をして、具体的な事業につなげていこうと思っていられるのか、それとも、例えば公共交通を充実させるであるとか、高齢者も住みやすい町をつくっていくことによって、高齢者を地域に呼び込んで活性化したいという政策提言なのか。どちらをポイントにしているのでしょうか。
- A** 考え的には後者のほうです。今から、ますます高齢者が住みやすい町づくりを推進したいという政策提言です。具体的な事業として、買い物支援や生涯学習等の生きがいづくりを考えています。



つながろう!くろかみ (熊本大学)

黒髪地区における学生と地域のゆるやかなつながりづくり

- Q** なかなか興味深く提言を聞かせていただきました。ユニークな取り組みをされる上で、大学側の核となる人たちは誰になるのでしょうか。
- A** 最初から学生を核にするのは難しいと思うので、まずは学生というよりは、大学の職員であったり、COC事業でボランティアに取り組んでおられる先生方に最初は協力していただいて、センターを開設することを想定しております。センターを開設をした後に、例えば、関心のある学生にもセンターの運営の協力をしてもらおうと考えています。

TOM (菊池市役所)

世界の国から Do you 農業?

～世代・国籍を超えた農業社会の実現を図り、農業の生涯学習化を目指す!～

- Q** 農業の担い手として外国人の方をターゲットに絞られたのは、何か理由があるのでしょうか?
- A** 今回、特に外国人の方をターゲットとしている理由として、農業分野に限らず、さまざまな分野で担い手、人手が不足しておりますので、今後は国内に限らず、外国人の方も担い手のターゲットとして考えておく必要があるかと考えております。現行の制度では外国人の方の日本国内定住については難しいところもございますので、それについてはさらに詰めて考えていく必要があると考えております。

FKHR (熊本大学)

VIVA! 耕作穂浮季地 ～耕作放棄されない地～

- Q** 耕作放棄地の活用策のご提案ということで、とても楽しいアイデアだと思いましたが、これは農業施策ではないということでしょうか。耕作放棄地ではなくなるけれども、農業はしないということでしょうか。
- A** 今回の提案だと、観光客を増加させるところに着目していると思われると思うのですが、農業に興味を持ってもらうきっかけとして、まずは県内の農業地域に来てもらうところが最初のステップだと思いました。最終的には農業人口を増やしたいのですが、まずは県内の農業地域を知ってもらうという点で、こういった提案にさせていただきます。

菊池スイッチON! (菊池市役所)

あなたのやる気スイッチ押します!

～市外へ行った「わきやあもん:若者」BIG なって帰ってけえ～!

- Q** 菊池市に戻って仕事がしたい、活躍したい、恩返しをしたいと思うのは、郷土愛が目覚め、スイッチを押すことで目覚めるというより、もともとあるもの、アンケート調査でも既にあるものでした。その中で、具体的に課題は何だと思われたのでしょうか。
- A** 菊池市民は郷土愛が強い方が多いのではないかと、ということが、われわれが調べている中で出てきました。ただ郷土愛が強い方が多いのに、なぜ菊池市に戻ってこないのか、というところを課題だと考えました。その郷土愛をいかに引き出すことができるかというのを考えた上で、課題解決策を考えてきました。



熊本大学大野研究室 (熊本大学)

行動経済学的アプローチによる熊本県の移住・定住政策

- Q** 非常に学問を使って、重要な課題を研究していただいて、とてもよかったです。質問ですが、このモデルには当然、前提条件が幾つか書いてありました。まず、理想的な公共政策の水準を自治体がつくり、それを移住者が合理的に選択していくようなモデルになっているわけです。皆さん方のモデルがどれほど実証的に有効なのか、現実の事例をこのモデルに走らせて検証はされていますか。
- A** 今回のモデルに関しましては、現実の事例の検証は行っておりません。今後、応用的な研究を行っていきます。



菊池で育てていいとも! (菊池市役所)

市民一丸となって子育てに取り組む『菊池一族 子育て応援隊』の創設

Q これはすぐにでも政策提言して事業化できますね。実際にやろうとしたときに難しいのは、担い手をどう確保するかとか、ネットワークをどう構築していくかだと思います。子ども食堂にしても、給食にしても、あるいは菊池寺子屋にしても、担い手をどう確保していくかというのがとても難しい問題だと思います。ぜひ、実現していただきますようお願いいたします。

A 子育て支援についてはどこの市町村でも同じような取り組みをいろいろしているとは思いますが。その中で、菊池市でできるような、菊池市ならではの子育て支援が何かと考えたときに、菊池市の基幹産業は農業ですので、地元の食材を生かした取り組み等をやっていたらということでご提言しました。



「里県だモン」(熊本県)

プロ里プロジェクト ～「プロフェッショナルな子育て」という働き方の提案～

Q 子どもたちの受け皿という観点から、すごく関心を持って、興味深く見せていただきました。非常にいい提案だと思います。1点だけ、プロフェッショナルな子育ての主体であるプロ里、これと里親との違いが分からなかったです。通常の里親とプロ里というのは、どのように違うのでしょうか。

A 通常の里親さん(養育里親さん)の場合は、特別な資格要件というのは設けられていません。ですので、県が実施します研修を受けていただいたり、ある一定の調査をしていただくことで登録ができるんですけども、このプロ里の場合は、一度は児童養護施設とか、そういったところで子どもの社会的養護というんですが、特別な支援が必要な子どもさんを養育する経験を持っている人たちを対象にしています。



★熊本大学賞(オンライン)



チーム名 「里県だモン」
テーマ プロ里プロジェクト～「プロフェッショナルな子育て」という働き方の提案～

■熊本県知事賞



チーム名 菊池で育てていいとも!
テーマ 市民一丸となって子育てに取り組む「きくち子育て応援隊」の創設

■熊本市賞



チーム名 つながろう!くろかみ
テーマ 黒髪地区における学生と地域のゆるやかなつながりづくり

■熊日賞



チーム名 TOM
テーマ 世界の国からDo you 農業? ～世代・国籍を超えた農業社会の実現をはかり、農業の生涯学習化を目指す!～

■商工会議所賞



チーム名 FKHR
テーマ VIVA! 耕作穂浮季地～耕作放棄されない地～

■市民賞



チーム名 菊池で育てていいとも!
テーマ 市民一丸となって子育てに取り組む「きくち子育て応援隊」の創設

講 評



熊本県 企画振興部 政策審議監
岡田 浩氏

熊本県企画振興部政策審議監の岡田です。

菊池市の3チームから、少子高齢化や人口減少問題に取り組む施策ということで、定住促進や魅力ある地域をつくっていく内容の御提案をいただきました。そのうち、プレゼンが最も良かった7番のチームを熊本県知事賞として表彰させていただきます。

本県では、熊本市が政令指定都市になった際、熊本市以外の地域が今後どのような地域振興を図っていくかという「地域ビジョン」をまとめました。その後、熊本地震が起きましたので、その影響を踏まえ、今年6月に「地域ビジョン」の見直しを公表しました。

それに基づき、この夏、県内市町村を訪問し、市町村長と意見交換をしました。市町村長の多くが、人口減少問題が一番深刻であると認識されています。今から10年、20年経った時、地域で働かれている方々が高齢化し、生業の跡継ぎがおらず人口が減少していった時、地域をどう維持していけばいいのか。若い人が地元に残ってくれない、戻ってこない。そういったことを深刻な問題として捉えておられました。

この問題にどのような手立てを講じるか、について菊池市の皆さんから御提案いただいたと思います。

日本全体が人口減少している時代です。これに対する特効薬というはおそらく無いと思います。

発表にあったような、その地域で生まれ育った方に地域に残ってもらいたい、あるいは一旦地域から出ていってもまた戻ってくることを実現したい、さらには、この地域を気に入って移り住んでくれる人を呼びたい。そういった、あらゆる手立てを講じて、総力戦で取り組んでいくことでしか解決できない問題だと思います。

今回、菊池市から3チームも御提案いただいたので、さっそく、取り組んでいただけたらと思っています。



熊本市 政策局長
古庄 修治氏

様々な政策提案がありましたが、どういう町をつくるかという理想を描くことが一番重要です。その描く思いが強ければ強いほど、具体的な政策につながっていくし、人も説得できるものと思います。そういうところで、グランプリを受賞された提案では、同じような経験をされた方を里親にして、実際、今の職場の中で本当に困っており、本当にそういう思いがあって、様々な環境の子どもたちを救うためにどのような社会をめざし、あるいはすくすくと健やかに成長するため具体的にどうしたらいいのかということを考えられての提案だったのだらうと思いました。

このように、皆さんが政策立案するときには、一番自分がどういう町にしたいかという思いが一番重要です。それから先の政策とか、あるいは事業の取り組みについては、いろんな情報があります。具体的な情報というのは、様々なところで、様々な取り組みをしていきますので、その中から自分の思いを実現するために、一番効果的なものを選択していく、その流れがきちんとできていれば、提案として非常に受け入れやすく、実現しやすいものになっていくと思います。

自分が実現したいこと、自分が理想とすることの思いを伝える、それが一番重要でないかと思っていますので、そのあたりを是非、今度のプレゼンのときに考えていただければと思っています。

毎年、様々な提案が出てきて、非常に楽しみにしています。来年も再来年も、ずっとこういう機会があり、様々な提案を聞くことを楽しみにしております。



熊本日日新聞社 役員待遇編集局長
荒木 正博 氏

初めて審査に参加させていただきました。日頃、弊社をはじめマスコミは、行政の監視役を自認してやっております。けれども今日は、夢のある政策を評価しようと思ってきました。審査員で行政経験がないのは私一人でして、異なる視点もあっていいかなという思いもありました。

荒唐無稽では困るのですが、今は夢みたいな政策であっても5年後、10年後は実現させる、近づける、知恵を絞れば可能になる政策も少なくないと思っております。そういう意味では学生の皆さん、現職の公務員の皆さんたちの提案を聞きながら、結構、創造性にあふれた政策もありましたので、ほっとした気分になりました。

いわゆるお役所仕事ではなく、ちょっとした発想の転換みたいなもので、一步、二歩と前に進んでいく。閉塞感が漂う今の時代にあっては、そういう行政や政策も、非常に重要ではないかと思っています。

熊日賞に選ばせていただきました菊池市のTOMは、「世界の国からDo you 農業？」というテーマで発表されました。ユニークで面白かったです。実現可能性という点では、もしかしたらエントリーの中では低いほうかもしれません。しかし、あえて日本国内にとどまらず、海外からどうかして外国人に来てもらい、就農してもらうためにどうすべきか知恵を絞った内容でした。難しい面もあると思いますが、ぜひ実現させてほしいという願いを込めての熊日賞ということです。

とても楽しく審査をさせていただきました。ありがとうございました。



熊本商工会議所 専務理事
谷崎 淳一 氏

熊本商工会議所の谷崎でございます。

人口減少、高齢化問題、コミュニティーの希薄さなどの地域が変えている課題に対して、いずれも多様なアイデアで、真摯に向き合っておられることに改めて敬意を表します。ただ、もう少し、先進事例を踏まえて検討していただければ、もっと実現に近づくとおりました。

熊本商工会議所が選びましたのは熊本大学の皆さんの「仮設住宅の再利用について」ですが、これも、オリンピックの選手村での活用の成功事例もあるようですので、そのようなものをもとに考えると、設置者である県を「うん」と言わせるぐらいの資料を揃えられると思います。

「田んぼアート」につきましても、今やられている玉名市や上天草市における問題点や効果などを把握していただくのも必要ではないかと思っております。観光振興と農業振興との調和も必要です。耕作放棄地の解消の問題ではありますが、一方で周辺の田んぼの所有者である農家の意識の問題もございます。桜の名所も、桜の季節には周辺の田んぼが荒らされ、違法駐車されて迷惑だという声も聞きます。そのような意味で、一元的な視点ではなく、より複眼的な視点で問題を掘り下げていただくのが公共政策において必要な姿勢です。農家の方々にインセンティブを与える意味で、周辺で採れた農産物を販売できるとか、観光案内の場を設けるといったことも考えていいのではないかと思います。

いずれにしても、今後は複眼的な見方でプランニングすることを心がけていただけたらと思います。改めて選ばせて頂いた熊本大学の皆さんの今後の頑張りに期待をしてエールを送りたいと思います。



熊本大学 熊本創生推進機構 教授
上野 眞也 氏

公共政策学の研究者として若干コメントをさせていただきます。若い方の政策提言に、コミュニティーの問題がありました。昔はあまり考えなかったテーマですが、大災害を何度も経験して、繋がるとか、絆とか、連帯とか、協同とかへの関心が高まりました。いま成熟社会に向かっているのかもしれない。他方で、私たちは、濃厚な関係性が嫌で、都会的で自由な生活に逃げ出してきた。誰かとつながりたい欲求と、それから自由でありたいという欲求が両方あります。自由で適度で楽しいつながり方をどう進化させていくかが重要ですね。

菊池市役所の皆さんの課題は、持続できる地域社会を作るための住民意識変革がテーマでした。菊池市は熊本都市圏と隣接し工業立地も進んでいます。生活する所としては非常に良環境ですが、七城のメロン農家とか旭志の酪農家などでは「事業継承」が難しくなっています。そこで働く仕事があり、それを生業として生きていく人たちがいかに獲得していくのか。菊池の優位性をさらに磨いていく観点からの、政策課題設定が欲しかったです。

大野研究室の皆さんが、モデルを使って政策課題を分析されたことを評価します。課題の構造をモデル分析で説明しようというのは、大学生らしいアプローチです。もう少し実証的な検証を加えられると説得力が増すと思います。

熊本大学賞を受賞された児童相談所の提案は、まさに社会が必要だと感じているものでした。データで補強いただくと事業予算要求もできるのではないかと思います。

多くのご提案は、すぐにも実現できそうなものがたくさんありました。公務員のやり甲斐は、自分で事業をつくって動かしてみることにあります。ぜひ、具体化についても考えていただけたらと思います。本日はご発表、ありがとうございました。



発行

熊本大学熊本創生推進機構地域連携部門

〒860-8555 熊本市中央区黒髪2丁目39番1号

TEL: 096-342-2044 FAX: 096-342-2042

https://www.kumamoto-u.ac.jp/kenkyuu_sangakurenkei/sangakurenkei/kico
<http://www.cps.kumamoto-u.ac.jp/>
